

令和7年度 学校関係者評価報告

鹿児島中央看護専門学校3年課程看護科では、平成23年度より教育活動実施状況を総合的かつ客観的に点検・評価し問題点を明らかにした上で次期の教育活動や学校運営の改善に活かし、開かれた学校づくりを進めることを目的とした「教育自己点検・自己評価」（令和元年度より「教育自己評価」とする）を実施しています。更に、令和元年度から関係業界、保護者代表等、学職経験者から成る「学校関係者評価委員会」を設置し、学校関係者評価を実施しております。

令和8年3月26日に「令和7年度教育自己評価」「令和7年度事業報告」の結果をもとに、学校関係者評価を実施いたしましたので、以下のとおり報告いたします。

令和8年4月5日

● 学校関係者評価委員

(1) 学校関係者評価委員（外部）

教育に関し知見を有する者	鹿児島大学教育学部 准教授 高谷 哲也
教育に関し知見を有する者	鹿児島中央看護専門学校 前校長 富安 恵子
関連業界関係者	鹿屋市立鹿屋看護専門学校 副校長 竹村 真由美
	関連施設教育師長 同窓会やよい会会長 松山 郁子
卒業生あるいは保護者	保護者代表 今西 由香

(2) 教職員

校長：今村 英仁 顧問：久徳 美鈴 副校長：櫻美 尚美 事務長：秋廣 定也
教務主任：中村 栄子 実習担当主任：飯田 かずよ
専任教員：納瀬 綾 森重 サユリ 大磯 陽子

● 令和7年度事業報告総括（櫻美）

令和7年度は、本校事業目標3つの具体的計画に沿って活動した。

1) 社会から求められる看護実践力の高い看護師の育成

- ① 全学年が新カリキュラムで運用。各講師の協力もあり計画通りに進行できた。カリキュラムに関する評価も教員で取り組むことで次年度への改善につなげることが出来た。
- ② 学生が主体的・能動的に学ぶ教育活動の推進においては、授業評価において学生の主体的授業参加は4.84を占めており評価は高かった。昨年度の授業参加態度に課題があったため、授業資料のペーパーレス化から講義内容により紙の資料も使

用するようになり、授業の参加態度については改善傾向にある。

- ③ 看護技術の習得に向けては、学年別到達目標に向い技術到達確認を実施。2年生においては、統合看護技術Ⅰ（模擬患者への看護技術の提供）を実施した。看護過程の実習に繋げる学習の機会となった。3年生は卒業前にディプロマへの到達状況を評価するため技術試験を実施。本校の期待する卒業生像に到達したかの確認となりと今後の課題も見えた。学年交流技術演習の成果は慈愛会学会で発表した。
- ④ 地域の多様な場での学習推進については、地域への関心を高めるための学習が計画に沿って実施できた。深い学びを得た。
- ⑤ 臨床との協働は倫理的感性を育むことを重視し、倫理カンファレンスを継続。学生は日常ケアや医療者としての姿勢などを深めている。統合実習Ⅰの工夫（ナースの臨床思考にふれる）は、学生の臨床判断を育む機会となり、その後の実習へ活かされていた。
- ⑥ 地域医療への関心の高い学生の輩出においては、県内就業率93%と本年度も高い就業率であった。3年生40名の就職・進路状況（慈愛会31名、鹿児島市立病院2名、鹿児島医療センター1名、南風病院2名、いまきいれ総合病院1名、さわ病院（大阪）1名、石心会病院（埼玉）1名、旭中央総合病院（横浜）1名 全員の進路が決定した。

2) これからの看護基礎教育の動向に対応した学習環境を整えるとともに、学生への支援体制の充実を図る。

- ① 学生ひとり一人の学習支援については、学力面・精神面に課題を抱える学生が増える中、学年担当を中心に学業に臨めるよう支援した。昨年度（令和6年度末）に学業不振（単位未修得）や病気療養による休学者の5名うち3名が退学となり2名が復学した。本年度は、進路の変更で1名退学、学業不振（単位未修得）1名が休学となった。合理的配慮の制度運用も学生に周知しているが現在申請者はいない。
- ② 新カリキュラムの卒業時到達自己評価では4段階評価において平均3.29（昨年比-0.44）と昨年よりやや低い評価であった。元々自己評価の低いクラスではある。本校の大事にしている「人間を理解する力」「人間関係を築く力」「高い倫理観と責任感」「研鑽し探求し続ける力」は身につけてきたと回答しており、多くの学生が身につけて卒業できたと考える。しかし、「臨床判断を行うための基礎的能力」2.9、「地域活動への参加と保健指導の基礎的能力」2.88と低い値であった。カリキュラム上では強化している所ではあるが、臨床で伸びるところでもあるため基礎的能力を身につけさせることができるように工夫をしていく必要がある。
- ③ 本年度は、卒業時到達を確認するための技術試験を実施し卒業生の現状と課題もみえてきた。次年度からのカリキュラムに活かす。
- ④ 教員の倫理行動指針を全員で活用しながら、日々の関わりを振り返る機会を継続。学生支援の充実に繋げている
- ⑤ 国家試験への支援については、実習終了から強化学習に取り組み全員合格を目指した。
- ⑥ 放送大学の併修制度は5年目を迎え、本年度は25名の学生が学んでいる。放送大学支援チームによる学生間交流や単位の取得状況を確認。卒業生の支援について、看護部とも情報の共有を行っている。本年度、放送大学の卒業のお祝いを開催したところ7名中4名が参加した。
- ⑦ 慈愛会奨学生（97名、79.5%）、専門実践教育訓練給付金（14名）が利用。多くの学生の経済的支援を継続的に行ってきている。
- ⑧ 電子テキスト、iPadの活用は定着。授業資料、学生の発表、技術動画の活用など工夫している。昨年度は、授業姿勢に課題も生じてきているため、授業資料等工夫を行ってきており講師の意見からは、授業態度は改善してきていると思われる。教育DXの推進に関しては、本年度は委員会を中心に学習会を実施した。次年度は、AIの学生の活用に関しての教員向け学習会、学生に向けたAI使用時のリスク管理、規程等の作成を検討していく。

- ⑨ シナリオ・アン等のシミュレーション学習についての共有と浸透が課題。教員学習の工夫を次年度も行う。教員学習会の取り組みや研究授業、看護研究については、計画に沿い実施。学びの共有となり自己の教授法へ活用。ディプロマの共有の機会となっている。
- ⑩ 安全管理委員会を定期的開催。ハラスメント事案無。本年度より合理的配慮に関して運用開始しているが現在まで申請はない。R7年度は、防災マニュアル（教職員用、学生用）を作成した。R8年より運用開始する。
- ⑪ 本校は全教員が有資格。教員 12 名と臨床指導教員を 2 名確保し質の高い教育に繋げることができた。非常勤 73 名。講師会議を 8 月に開催し、学生の現状を共有した。
- ⑫ 教育の質向上に向け、各教員は目標管理を行いながら自己啓発を目指した。R7 より新ラダー運用。また、本年度は 4 名がラダー申請している。
- ⑬ 教員学習は定期的に取り組むことによって、教育観をそろえる機会となり、他教員の取り組みを参考に授業に役立てている。
- ⑭ 本年度は、医療安全管理者研修、災害支援ナース研修に参加した。

3) 学校の存在価値を高め、地域に必要とされる学校運営を推進する。

- ① 本年度は学生確保のために高校訪問 44 校 内離島 5 校、熊本・宮崎 7 校の訪問を実施。さらに、病院訪問を 24 施設実施した。しかし、推薦・一般入試では 25 人の確保しかできず、2 次試験、3 次試験に向けて、27 校の高校訪問、5 つの大学・短大への案内等を実施した。結果、30 名確保。3 次試験で 3 名受験となった。
- ② 令和 7 年度は外国人留学生 1 名が入学。支援教員を付け、放課後、学習の理解度や悩み等をきき支援してきた。次年度は、本格的に実習が開始されるため、実習記録、電子カルテでの情報収集の方法等さらに支援を強化していく必要がある。本校が外国人留学生の看護師資格取得への道に貢献できることは、キャリア形成の機会拡大への支援につながり大きな意義があるため、今後も支援体制を整備し、入学者を獲得していく。
- ③ 学校の運営に関しては、学生数減のため厳しい状況であったが、不要な経費削減につとめ+収支とすることができた。
- ④ 教育の要となる教職員の働きがいのある職場づくりにおいては、有給取得は、必要時取得できる風土がある。お盆、正月を含め学校全体で 5 日間の休暇取得ができた。
- ⑤ 組織風土調査では、昨年比では仕事の充実感や意欲は伸びたが、チームワークが若干低下。本年度、退職者は 1 名。新たな教員を 1 名迎えるが、教員経験もあるため、新たなチームで意欲を持ち仕事ができるように支援していく。
- ⑥ 教務事務との協働は効率的に進めている。
- ⑦ 学校評価委員会を定期的開催。中間での取り組みを教職員で共有。自己点検においては年間の取り組み状況と評価の視点を共有し教育自己点検への協力を求めた。学校関係者評価委員会は継続して開催予定。
- ⑧ 地域に根ざした貢献活動では、学生による地域清掃活動を継続。(3 学年全員の学生が参加)。また、3 年生は本年度より社会福祉協議会のボランティアにも 1 回/一人参加した。
- ⑨ 人間総合科学大学からの専任教員の教育実習を 1 名受け入れた。
- ⑩ 発達障害のある学生支援に関する教育セミナーを実施し、県内から 96 名の参加があった。
- ⑪ 中学校の出前授業を 3 校、高校ガイダンス 1 校実施した。
- ⑫ 企業の給食従事者衛生研修会の講師として 3 名参加した。

● 令和7年度教育自己点検・自己評価 報告（中村）

- ・ 令和7年度、教育自己点検・自己評価結果と次年度への改善事項について報告。
（結果は令和7年度 教育自己点検・自己評価参照）

● 協議事項、意見交換

< 授業評価に関すること >

竹村：ペーパーレス化により学生の授業参加態度に課題があり、必要な講義では紙の資料を使用するようになったと報告があった。P15の授業評価では教員への授業評価が高いが外部の講師の評価は、どのように実施しているのか。意見交換はどのようにしているのか。

中村：外部講師、学内の教員共に終講日にチームスを使いアンケートを実施している。講師との意見交換は、講義が終了際に学生の様子を伺い、工夫されている点や困っているところなどの情報交換をしている。

高谷：講義後、学生の様子や困りごとなどの情報共有し、教員のメッセージと外部講師のメッセージに大きな差がないようにすることすることが大切。アンケートの数値が高すぎるのは2つの理由が考えられる。①学生が正直に答えていない。評価疲れ②教員の頑張りが伝わっている（信頼関係）教員との関係性が影響している。

納瀬：1年生は、主体性が育った。適当に評価を付ける学生もいるが信頼関係ができ分かったこと、分からなかったことなどの学生記述がありそれを参考にしている。

大磯：2年生は授業での反応は乏しいが、アンケートは具体的に記述している。その内容を次の講義へ活かしている。

森重：3年生は毎回評価を低くつけてくる学生がいた。講義中の反応が乏しくても終講アンケートでは先生方への感謝を述べる学生が多く外部講師のやりがいにつながっているところもある。

櫻美：数字を全て受け止めるのではなく内容を受け止めることが大切。

久徳：無記名でのアンケートで始めたが、そうすることで何でも書く学生がいた。記名にすることで目的を意識して評価するようになってきたと考える。

富安：以前から外部講師と教員との距離が近く、学生の意見もあたたかく受け止めてくれ教育効果が上がっている。

< 主体的な学習に関すること >

富安：P13の表に授業以外での自宅学習を全くしないという学生が3年生5%になっている。やる気がないのか、学内や実習で身につけているのか？やる気がない場合100%の合格につながらない。

納瀬：1年生は、アルバイトを多くしており、与えられた課題にのみ取り組んでいる状況。長期休暇中の課題で少しでも机に向かうようにしている。

大磯：2年生もバイトや携帯など誘惑が多く主体的に取り組むことができていない。週末課題を出すようにしているが、内容は転記のみになってしまう。

森重：3年生5%の学生の中に、今回の国家試験不合格者がいる。自宅学習が進まない学生は、成績が低く課題に取り組ませても学習内容が浅い。実習帰校日の夕方に残って学習させたが、それでも残らずに帰ってしまう学生がいた。最終的に12月ごろから慌てだし「もう少し早く取り組むべきだった」と話している。こちらが提案しても本人のやる気が出ないと前に進めない。

櫻美：アンケートでは、主体的に学んでいると回答するが自宅での学習はしていないという矛盾する結果が出ている。主体的に学ばせたいが、教員側から課題を与えないとしない現状がある。今後も支援を要する学生は増えると思われるため、さらに対策が必要である。

〈学生の定員割れに関すること〉

富安：高校自体の学生減少があり多くの学校訪問をしても定員確保ができない。国際大学に学生が集まる。鹿中看のアピールをしてもなかなか難しい現状。専門学校がどう生き残っていくか。定員を減らすのか。減らしたところで人数確保ができるのか課題がある。

櫻美：高校生が大学志向になっている。県外の看護大学へ流れている可能性あり。高校の先生方によると、すべての学生が大学志望ではないが看護師を目指す学生が少なくなったとのこと。これは、コロナを経てなのか看護師の待遇面など社会的な影響もあるのかもしれない。看護師を目指す学生を少しでも増やせるように中学校への出前授業を（総合の時間を使わせていただき）3校行った。次年度も継続する。また慈愛会看護師の確保としての役割も学校は担っている。寮の確保ができたことで離島や県外への訪問も拡大した。慈愛会の学校である強みやダブルスクール（放大）を強みにアピールしていく。

久徳：この流れは今後変わらないが、学校がどのような機能をもって進めていくかあり方の検討が必要。

富安：親が看護師を進めていないのか。今度朝ドラで看護師の話が始まる。これをきっかけに関心を持ってもらえたらと期待する。

竹村：本校は公立であるが初の定員割れであった。親の看護師離れを高校訪問でも感じる。YouTubeでの看護師になるなら大学へ行くべきなどの発信が専門学校への進学へ影響している可能性がある。本校でも入試の形態や試験内容の検討をしている。

今西：一人一人に真摯に向き合いここまで引き上げてもらった。実習で悩んでいるときも教員が寄り添い3年間で看護の楽しみや喜びを感じている。良い環境で学べる学校なので、定員割れするのは残念である。介護職の中には、看護師になってみたいという人もおり看護体験や出前授業は貴重な体験になる。

松山：やよい会でも学生募集を呼び掛けた。AIにとって代わることのできないのは慈愛会の中にある「慈愛の看護」である。ほかの学校にはない何かがあるのかをアピールする必要がある。

高谷：社会的に難しくなっている学生募集であるが、貴校を選んでもらうにはどうすればよいか。大学志望でない学生をターゲットとしたとき、①在学生に貴校を選んだ理由を調査する。②生の看護師と接することでのインパクトをどう生み出すか。看護師への憧れを持つことで早く看護師になりたいと思う学生を掘り出す。そのためには、出前授業は有効。出会いの場のチャンスである。社会人をターゲットとする場合、学費のこと家庭との両立などのアピールをするとよい。学びたい社会人との出会える機会を作る。学士志向の学生をターゲットとする場合は、学士をとるベースとなる力がここで育まれるという意識を与える。

富安：以前は、姉妹や兄弟、親子で本校に来る学生が多かった。学校がよかったと思えたから勧めていたと思う。学生が、出身校へ行きアピールする機会を持つことや病院での看護体験を増やしてもらっただけでも看護師になりたい人へとつながる。

竹村：介護職の人や衛生看護科のある高校で福祉や介護の学生の中に看護師になりたい人がいる。ビジネス系、商業系の学校でのスカウトも良い。学士志向でe-ラーニングで大卒を目指す時代。学士をとると昇給するのも強みである。教員はこれまでの体験で看護の仕事は魅力的であることを分かっているが、学生に伝えられているかを問い続けることが必要。

松山：ふれあい看護体験、中学生の職場体験などで本校のパンフレットを渡している。

櫻美：学生確保が困難であるが、チャンスを作るには自分たちが出向かなければならない。学生の学びの支援、本校の良さが伝わるように教育に取り組んでいく。

〈教育活動の次年度へつながる課題に関して〉

松山：令和7年度教育自己評価(3)教育活動評価の中にOSCEの次年度へつなげる課題とは。

納瀬：今回3施設より看護師2名ずつ来校してもらい急変時対応に関しての実施を行った。最後に看護師の方にモデル対応を見せてもらい学生はカッコいいなど刺激を受けていた。また来ていただいた看護師からは、実習で見ていた学生の成長を感じていただけた。臨床の場と協力して教育することで学生は成長する。今後も継続していきたい。

松山：卒後アンケートにて代弁する力が低いとあったが、新人看護師が一番患者へ心を寄せている。多職種と新人教育を行うこともあるが豊かに意見を述べることもできている。発信力は今から伸びていくところかもしれない。またラダー1を確実に取れており主体的に学んでいると考える。支援が必要な学生が看護師になった際、文章が書けなくてラダー申請に困難さがある。話を聞くと思いはある。

櫻美：合理的配慮を申請している学生はいないが、そうでありそうな学生は学年に若干名いる。教員間で学生の特徴を理解しながら支援はしている。高谷先生にも意見をいただいたりしている。命を預かる職業であり目標は下げずどう育てるか。現場でも大変だと思われるが、本人が困らないと前へ進めない。今後もどのように支援していくか、考え続けることが必要である。

● 令和7年度 総括

今回の学校関係者評価は「令和7年度教育自己評価報告」「令和7年度事業報告」をもとに実施いたしました。特に本年度は、少子化の影響や基礎教育大学化の流れの中、学生確保に苦戦しました。評価委員の皆さまからは、参考になるご意見をたくさん頂きました。次年度はさらに、専門学校としての強みをアピールし、広報活動を行っていきたいと思います。また、授業評価では、点数以外から読み取れることや外部講師の方々との連携の在り方などご意見を伺う機会となりました。さらに、質の高い教育ができるように継続していきたいと考えています。学生の主体的な学びに関しては、学生一人ひとりにあった学習支援が必要であることを再認識させていただきましたので、学生一人ひとりにしっかりと向き合い支援していき

今後におきましても、より良い学校運営を推進していくため、学校関係者の皆様から頂きましたご意見を真摯に受け止め、学校運営に活かしていくとともに、本校の教育理念に沿った、質の高い卒業生を看護師として継続的に輩出し、地域医療に貢献していけるよう努めていきたいと考えております。ご協力、ありがとうございました。